

内面化と社会的前意識

——社会過程としての社会化——

加 藤 隆 雄

序．形骸化

社会化論が教育社会学の中心的な位置を失ってから久しい。個人と社会を接合する概念として、また発達の社会的拘束を指摘する概念として、あるいは教育の社会的基盤を指示する概念としての社会化の重要性は絶えず説かれてきた⁽¹⁾。さらに二次的社会化の諸領域において経験的研究も蓄積されてきた。しかし、社会化の概念は内実として形骸化する一方だったのである。「形骸化」とは二重の意味においてである。①社会化概念の重要性だけが題目のように説かれて、議論は20年来新たな発展をみないこと⁽²⁾、②パス解析などに見られるように学校教育以外の諸影響力全般を「社会化」とみなし、社会化過程全体をひとつの変数として考えること、つまり社会化過程や内容は社会学的に問題にしない（ブラックボックス化）と同時に、社会化の過程と内容については心理学研究が参照されること（心理学への《研究委託》）⁽³⁾。

現在社会化論は、社会的学習の理論や対人技能の発達などの心理学的研究に置き換えられてしまった観がある⁽⁴⁾。ところがこれらの研究は、社会化論の存在意義である個人と社会の接合という論点を欠いており、社会学的観点からはもはや社会化論とは呼べないのだ⁽⁵⁾。

このような事態が社会化論の重要性が減ってしまったことの反映ではないことはもちろんである。原因は社会化を社会学理論がどのようなものとして扱ったかにあったと考えられる。社会化論を組み込んだ社会理論は、行動主義心理学とフロイト理論に依拠したパーソンズ⁽⁶⁾と、G. H. ミードを採用したバーガー&ルックマン⁽⁷⁾の著作に尽きるものと思われるが、援用した理論は異なっても、両者が社会化を社会理論に組み込む手続きは同じであった。すなわち、幼児は相互作用において価値・規範や意味をパターン化し内面化する。この内面化された価値・意味に則って行為がなされるので社会秩序は維持されるというものである。

東京大学大学院

内面化と社会的前意識

しかし、本稿ではこのような手続きを問題視する。上記の事態は、社会化の本質を内面化と考えることから引き起こされたと考えられるのである。内面化の概念は個人の内面を対象にせざるを得ない⁽⁸⁾、それが個人心理学に結びついて社会化過程の研究が心理学に委ねられ、社会学は社会化過程をブラックボックス視するようになる、という因果連鎖はみやすいものだろう。そこで本稿は、まず内面化の概念を中心に組み立てられている社会化論の枠組とはどのようなものを要約し、それが内面化に依拠するために発生する理論上の困難を取り上げ、次にこれらを回避するためにどのような理論枠組が必要か、そしてそれはどのような事態を説明するのかを概観する⁽⁹⁾。

1. 内面化

最初に社会化概念がいかなる重要性を担っていたかを確認しておくことにしよう。社会学史上で、最も早い時期から個人の社会化に注目していたのが、E. デュルケムとF. ギディングスであった。周知のように、デュルケムは、教育を方法的社会化(socialisation méthodique)と捉え、「社会が、固有の存在条件を不断に更新するための手段」と位置づけた⁽¹⁰⁾。同様にギディングスは、社会結合の本質を「同類意識(consciousness of kind)」であるとし、社会化とはこの意識が育つ過程だと考えた。ギディングスにとって社会化は社会結合を可能にするものだったのである⁽¹¹⁾。

このように、社会学の誕生当初から社会化は社会秩序が可能になる条件としての地位を与えられてきたのだ。そしていまや常套句となった「個人と社会」という社会学上のアポリアの解決もまた社会化論に期待されてきた。個的存在が社会的存在になることが社会化であるから⁽¹²⁾、社会化は「個人と社会を接合する概念」だったのである。

個人は社会の要素であるから、個人なくしては社会はありえない。また、諸個人の手からなるはずの社会は、外在的なものとして個人を拘束する。この二律背反を社会化論は次のようなかたちで解決しようとしてきた。乳幼児は未だ社会の成員ではない。新参者が社会のメンバーシップを獲得するためには言語に代表されるコミュニケーション技能を習得し、またしつけを通じて成員に共有された価値を内面化しなければならない。ところが、このような技能や価値は個人の内的欲求から派生するものではなくて、個人にとって外在的であり、それゆえ拘束的なものなのだ。したがって、個人が社会の成員になるということは、必然的に限定や制約に甘んじることである⁽¹³⁾。

しかし、これはまだ問題の片面である。個人—社会関係は、個人にとっての社会という観点からだけでなく、社会にとっての個人という観点からも論じられなくてはならない。なぜならば、いかに個人が社会的技能や共有価値を習得しようとも、それによって社会が維持されるだろうとはまだ言えないからだ⁽¹⁴⁾。社会が諸個人を介して自らを維持していくメカニズムが明らかにされなければならないだろう。デュルケムとその影響下にある二つの社会理論、すなわちパーソンズの社会システム理論とパー

ガー & ルックマンの現実構成主義 (reality constructionism) は社会秩序の維持が、社会過程における価値の「内面化〔内在化〕 (internalization)」にかかっていると考えられる。デュルケムにおいて社会秩序は、若年者に対する教育によって意図的・計画的に維持されるものだった。「社会的存在を…個々人の内部に作り上げること、これこそが教育の窮極目標なのである。」⁽¹⁵⁾

これに対してパーソンズは、社会化のメカニズムとして、(a)報酬—処罰のメカニズム、(b)「模倣のモデルとなることによる」教授のメカニズム、(c)「愛着に基づく同一化による」価値習得のメカニズムの三種を区別する⁽¹⁶⁾。社会化を意図的な教化だけではなく、社会化される側の模倣や相互的愛着から派生する価値パターンにまで拡張した点で、パーソンズの議論は社会化の無意図的レベルを明るみに出した。このメカニズムは次のような形で社会システムに結びつく。

この社会化効果とは、共通価値が自我のパーソナリティのなかに内面化され、自我と他我のそれぞれの行動が相補的な役割期待—サンクション体系を構成するにいたるように、他我（複数の他我）の役割にたいして相補的な役割のなかに自我が統合されることと考えられる⁽¹⁷⁾。

こうしてパーソンズは、報酬—処罰のメカニズムについては行動主義心理学を、愛着による動機づけのメカニズムに関してはフロイト理論を援用するが、特に重要なのは価値習得に関してである。というのは、価値指向パターンは「体系としてのパーソナリティと社会体系の役割構造とのあいだの主要な公分母」⁽¹⁸⁾ だからである。これについては、カーディナーのパーソナリティ理論と対照して次のように述べる。

……この基礎的パーソナリティ構造の戦略的な要素を作り上げているのは、社会化の主要な担い手の自我にたいする役割期待のなかに具体化されている価値指向の内面化であると結論してよい⁽¹⁹⁾。

内面化された指向のパターンと社会体系のパターンとの一致が、社会体系を維持するように機能するのである。

バーガー&ルックマンの社会理論は、人間の諸活動によって産出され制度化される客観的現実としての世界と、意味の秩序である主観的現実としての世界が相互に翻訳されると考える⁽²⁰⁾。そして、「社会化とは、社会ないしはその部分の客観的世界のなかへ個人を包括的かつ調和的に導き入れることである」⁽²¹⁾。第一次社会化において、新参者は他者がすでに生活している世界を「引き継ぐ」⁽²²⁾。内面化とは、ここでも社会化の基本的な過程である。

〔内面化は〕客観的な出来事が意味を表しているということの直接的理解、ないしは解釈、つまりそうした出来事は他者の主観的過程のあらわれであり、だからこそそれは主観的に意味のあるものとなる、ということの理解や解釈である⁽²³⁾。

内面化と社会的前意識

つまり、彼らにとって内面化とは解釈過程のことである。このような解釈によって乳児は他者の役割を内面化すると同時に、それが位置づいている客観的世界をも取得するのである。そして、他者から呼びかけられた者としての自己のアイデンティティを獲得することで、自分の客観的位置を内面化し、その結果、客観的な社会構造は主観的現実の中で維持されることになるのだ⁽²⁴⁾。

依拠する心理学理論は違え、社会がどのように自らを維持するかに関してパーソンズもバーガー&ルックマンも基本的には同一の論理構成に拠っている。両者の議論は、個人の内部に社会的な体系が存在しており、個人はそれに従って意識したり行為したりするが故に社会秩序は存続することになる、というものなのだ。社会化が成功している限りにおいては、内的な社会体系に準拠して行為する者は社会適合性を産出することになり、社会秩序は維持されるのである。このような《自動制御》のメカニズムを可能にするのが内面化なのであり、そのプロセスの研究は心理学に依拠することになったのである。

しかし、これによって一見奇妙な論理が成立することになった。社会秩序というマクロな状態は、個人における内面化というミクロなプロセスによって維持されるのである。この点を次節で検討しよう。

2. 内面化の逆説

内面化の概念は、社会化過程を心理学研究へと委託してしまったが、これが望ましいものでないのは、心理学が社会構造的なものを扱うことができないという単純な理由によるのではない。彼らは先に挙げた個人対社会という二律背反を内面化による自動制御によって解決したものと考えたが、社会秩序を内面という個人領域に送り返す論理構成は次のような奇妙に逆説的な問題を引き起こすこととなる。

まず第一に、内面化された価値パターンや意味体系という概念図式は主意主義的な人間像を含意している。というのは、このヴィジョンによると、個人は内面化された価値や意味を参照しつつ行為する者だからである。しかし、個人はそのようにしなくとも行為できる。そのとき、個人としても一種の《自動制御機構》を働かせているのであって、わざわざ内面の価値・意味を参照しなくとも、日常環境では社会適合的行動がとれるのである⁽²⁵⁾。とすれば、この《個人的自動制御機構》と「内面」はどのように関係しているのだろうか。もしもこのような制御機構をも「内面」に含ませるのであれば、我々の内面は「意識」では覆い尽くせないものになる。意識から抜け落ちるものも内面を通過していると論ずることは、内面の概念を無限定なものにしてしまう。自動制御を介して行為した場合でも、行為者は内面を「無意識的」に参照したのだ、と言い張ることもできるかも知れないにしても、そうすると「内面」とは一体何を指すことになるのだろうか。

第二に、それとは全く逆の観点だが、内面が社会化されていると考えることは、

「ホモ・ソシオロジクス」⁽²⁶⁾や「過社会化人間」⁽²⁷⁾と形容されてきた完全な社会人間を想定することになる。しかし、このような人間類型は現実から遥かに遠いものである。特に、近代社会における個人意識は、社会的拘束に鋭く対立するものとして存在してきた。(そしてこれが個人対社会の問題をもたらしたのである。) 社会化が個人の内面を組織立てているのならば、このような非社会的な個人意識はどこに由来するものなのだろうか⁽²⁸⁾。もちろん、内面と個人意識とは別物で、個人意識はパーソナリティ統合や言語的な反省性や社会化の失敗や異文化接触から派生するものだ、ということもできよう。しかしこの場合、我々はこのような「内面」によってどのようなものをイメージすればよいのだろうか。言葉を変えて言えば、反省作用が未だ及ばないので価値や意味をストックしておくことしかできない機関を「内面」と呼ぶことは、一体どのような妥当性を持つのかということである。

内面化の概念が一貫した説明性を持つものとした場合、問題はそれが主意主義的であり、かつ社会適合的な人間像を前提としていることにある。このような含意はまさに社会の自動制御のメカニズムとして好適なものなのだ。何故なら、自発的に社会適合性を産出しようとする人間像、意識的に社会秩序を維持しようとする人間像だからである。

しかし、このように論じてきたからといって、私は内面や内面化の概念を葬り去ろうとしているのではない。人間には明らかに内的なかつ個人的部分が存在している。意識・記憶・感情・気分・空想・思考・企図・個人的知識・ひらめき・秘密・信念…。けれども、社会化の本質を内面化の概念に求めることは、逆説的だが、これら内的活動の余地を大幅に制限してしまう。というのは、内面化されたものは共有の価値や共有の意味であり、それらによって個人の内面は占拠されていることになるからである。その結果、社会化論を基礎とする社会理論は、創造的活動や革新的運動が真空から生じてきたかのように扱うか、「社会化の失敗」として片付けるか、いずれにせよそのメカニズムを扱い得ないでいる。

本稿の立場は次のようなものである。従来の社会化論は、個人的な内面の問題まで社会化に含めてきた。しかし、個人の創造性の問題は社会化とはひとまず区別されるべきである。社会化の過程は個人の内面に還元できるものではないし、個人の内面も社会化に帰属しうるものではない。これは、社会化過程を個人内過程としてではなく、社会過程として考えるべきだということである。社会化過程を個人内の発達過程として翻訳することはもちろん可能である。しかし、それは立体を平面に投影することが可能であるという意味においてである。この投影は個人心理学の研究様式なのであるから、社会学に義務づけられたものでない以上、我々にはその方式を踏襲する義務はないのである。

だが、内面や個人心理に還元しないような説明方式は考えられるのだろうか。それは、社会化を内面を介さない「外的な」過程と考えることである。このような主張

内面化と社会的前意識

は、例えば反射弓による動作や条件づけ反応をイメージさせるかも知れない。そのような捉え方も可能かもしれないが、反射行動と考えたところで社会学的に何か新たに加えられるわけではない。とはいえ、ある種の概念化はしておくべきであろうから、それを《社会的前意識》⁽²⁹⁾と呼んでおく。「前意識」には、フロイトの用法に倣って、意識はしていないが、指摘されるならばそれとわかるような非反省的なレベルにあるもの、という意味を含ませている。フロイトの場合、前意識は主体の内部構造をなすものだったため、ここでは社会過程と主体との接点という意味で「社会的」という形容を施したのである。

これはいわば個人と社会の《中間領域》である。これによって、個人の社会性を内面化という経路によって秘私的なものとする必要もなくなる。そればかりか、社会化研究と現象学的研究との接点が可能になるのである。A. シュッツとエスノメソロジーによって探究されてきた“自明視された領域”がここに位置すると考えられるのである⁽³⁰⁾。社会的前意識によって開かれた領域は、言語や意識の媒介もなく生きられている部分なので、幼児はもちろん、成人にとっても意識にのぼらない。しかし、彼はそれを用いて生活してきたのだから、意識されていない諸手続きは空気の如く当たり前である。けれども、この領域は現象学的研究においては、個人的発生の観点から、つまり社会化の問題としては提起されてこなかった⁽³¹⁾。あるいは、なぜ自明視されるようになるのか問うてこなかった。社会化論の観点からすれば、それにこう答えるであろう。それらの手続きは、社会化の過程において言語や意識の媒介なしに開発されたものだから、それは非反省的なレベルに止まっていたのだと。こうして、社会的前意識の探求には有望な研究蓄積が存在している。しかし、ここでその精緻化をすることはできないことなので、次節では、社会化を社会過程として捉えるとき社会的前意識はどのような相貌を帯びるのか、またそれはどのように作動しているのかということを示そう。

3. 社会過程における社会的前意識

社会的前意識は現実の相互作用において作動する。それは自我や身体の何処かに位置づく“機関”なのではなくて、“機能”として捉えるべきである。そしてそれは、L. ヴィトゲンシュタインが「言語ゲーム (Sprachspiel)」⁽³²⁾と名付けたものに関わっている。

ヴィトゲンシュタインによれば、言語はどんな場面でも使うことのできる普遍的道具ではない。むしろ、場面に応じて別々の道具が用いられるのだ。場面Aと場面Bで用いられる言語はそれぞれ異なった体系を持っているのである。例えば、対象を指示して命名するとき、数を数えるとき、呼び掛けるとき、驚いたり感嘆したりしたとき、命令するとき、問いかけるとき、罵るとき、挨拶するとき、…⁽³³⁾。こうして社会生活は言語を用いた相互作用の諸タイプ、無数の「言語ゲーム」から織り成されてい

ることになる。これらのそれぞれは、E. ゴッフマンが“frame”⁽³⁴⁾と呼んだところの特定のパタンの社会場面を形成しており、それぞれのゲームはこの枠の中で独自の社会関係を有している。それは、ゲームがルールに基づいて進行しているのと同様である。

社会的前意識は、この言語ゲームの中で、目下の言語ゲームを別の言語ゲームから分別するようにして作動している。そして、社会化とはこの社会的前意識が適切に作動するようになる過程のことである。だから、例えば「水をもらえないかな」という発話を質問と取って、「はい」とか「いいえ」と答える子供（成人）は、社会化されていないと言われるのである。「水をもらえないかな」は〈依頼〉の言語ゲームなので、水を持ってくる（あるいは拒む）という行動が適切である。この行動は「水をもらえないかな」という発話の意味から直接に導出されるものではない。この言葉自体をいくら分析したところで、水を持ってくるという行動は現れないのだ。また、適切に水を持ってくる子供に何故そうするのかを尋ねても、「だってこの人は水を欲しがっているから」と答えるであろう。子供のこの解釈の直観性こそが社会的前意識を指示するものである。つまりここでは、「水をもらえないかな」という発話が疑問文の形をとっていることは、子供にとって全く意に介されていない。ここでの適切な行動とは適切な相互作用の遂行である。そして、その適切な行動は内面化された価値や意味を参照した結果得られるものではないのだ。

確かに、「水をもらえないかな」は「水が欲しいから、持ってきてくれ」という意味に取らなければならない、そして水を持ってきてやらなければならない、というふうに母親から教え込まれた子供もいるかも知れない。または、この子供は、自分の過去の体験を振り返ってこの言葉を使う人はすべて喉が渇いていた、という一般化したのかも知れない。しかし、すべての子供がこのような思考回路を通っているのだろうか？ そして読者諸氏はどうだったのだろうか？ このような判断を迫られた記憶は深く埋もれてしまっただけなのだろうか？

この質問の形をした依頼に「はい／いいえ」で答える子供もいる。けれども、その答えが例外なく遊びの様相を帯びていることから、子供はその発話が指示する言語ゲームはいかなるものかを認知しているものと考えられるのだ。しかも、この認知の仕方というのは、内面の記憶や価値や規範を参照した結果ではなく、その場の相互行為を成し遂げるといって成立したものなのだ。そして子供は、「婉曲話法」として理解しているわけでは全くないのに、それと同様の知識を持っていることになる⁽³⁵⁾。しかし、子供はそのような知識を持っているという自覚はないだろう。その知識は使用されて初めて現れるからだ。だからこの知識を持っていることを、子供はもちろん成人でさえ気がついていないのである。これが社会的前意識とよぶ所以である。

一般に、言語習得とは言語の意味の内面化ではなく、言語の用い方の習熟である。なぜなら、ヴィトゲンシュタインも指摘した通り、単語 a の意味は、別の単語 b によ

内面化と社会的前意識

って表されねばならず、そのbはまた別の単語cによって、…というように無限廻行に陥るからである⁽³⁶⁾。しかし、もちろん単語aの意味を物理的対象Aを指示することによって与えることもできる（語の直示的定義）⁽³⁷⁾。しかし、すべての語がこのようにして与えられるわけではない。次の言葉はどうだろうか？「あっち！」「助けて！」「すごい！」「ちがう！」⁽³⁸⁾「やっほー」また「一つ、二つ、三つ」…これらの語の意味は何を指し示すことで与えられるのか？これらの語にどのような定義が与えられるだろうか。使ってみせることが最も手っ取り早い定義なのではないだろうか？語の直示的教示の場合には物事を指し示しながら語を発音するということが、〈直示〉の言語ゲームにおける用い方だったのだ。同様に、「一つ、二つ、」は、数を数えるという言語ゲームにおける用い方である⁽³⁹⁾。つまり、語の直示的教示も含めて、語はその使用法も含んだ全体として習得されなければならないのである。言語習得はこのようにして起こるので、「青ってどういう意味？」と尋ねられた大人がしばしば説明に困るというのも、言語習得にとって定義はむしろ二次的なものだということを示しているのだ。我々は語の使用法全体を理解できなければ言葉を適切に使用できないのであるが、いかにして言語ゲームを分別しているのかと問われると、当惑を感じざるを得ない。我々はその場の「雰囲気」を微妙に嗅ぎ分けているのだが、それは体系化されたマニュアルとして内面化されているわけではない。皮肉にもこのことを裏付けるのは、言葉は意味を確固として持っているという我々の信念である。というのは、現実には言葉の意味によって使い分けているのではなく、言葉を使用する「文脈」によって使い分けているというのに、我々は「言葉は意味を習得するものだ」ということを信じている（内面化している）からである。このことから、使用法のマスターがいかに意識に上らないものか、にもかかわらず我々はその作業を首尾よく成し遂げているということが証明できるのである。

したがって、幼児は語の意味を知ってからそれを用いるようになるのではない。正しく用いることが意味を知ることなのだ。しかし、こう言っただけでは不十分である。幼児が正しい使用法を習得するのは、幼児ひとりの力によるものではない。適切な使用法とは適切な相互作用のことであり、相互作用をいかに上手に協働できるかである。言葉（発話）はこの相互作用の指標（index）に過ぎない。幼児にとって言語習得とは相互作用の中で適切に言語を使用し、適切に協働できることである。

例えば、乳幼児における母子相互作用においては、それは母親との協働にいかに参加するかということである⁽⁴⁰⁾。（この母子協働が相互作用の範型であろう。）このような相互作用において社会的前意識は機能していると考えられる。というのは、乳児に内面を求めることはできない相談だからである。この時点ですでに幼児は適切な相互作用の入り口にいるのだから、いかに社会的前意識を開発するかは母子間のやりとりの質にかかっている。

他者の役割取得（taking the role of others）⁽⁴¹⁾もまた社会的前意識の作動する顕

著な場である。幼児が意味のある他者の役割を取得して、自ら他者に「なりすます」という現象において、幼児は自らの姿を他者のそれに似せようと意図するわけではない。もしそうだとすれば、幼児には大変な自己認識の努力が必要とされるだろう⁴⁽²⁾。ところが幼児はいつもたやすくまごを始めるのである。このことから、幼児は模倣を内面を通して行っているのではないということが示唆される。幼児は「声を出して考える」と言われるとおり、実際に演技をすることで他者の役割を取得しているのだ。演技することが取得することであって、役割を内面化してしまってからその後で内的イメージに忠実に表出行為を行うのではない。こうしてここでも、社会的前意識の作動する姿が見られるのである。

最後に子供の遊びの例を挙げることにしよう。子供同士で遊ぶときに彼らはその行為が遊びだということを知っている⁽⁴³⁾。それは我々がテレビや映画や演劇を見ていて、それが現実ではないと知っているのと同様である。子供は遊びという相互作用を適切に行うために、幾つかのキューを呈示している。例えば、真面目なことを言いながら笑うこと、相手がとてもできないことを求める、相手の言ったことを繰り返す、相手の問いに対していつも同じ答えをする⁽⁴⁴⁾、…など。これらは当事者間で意識的に定式化されたりマニュアル化されたりしているわけではない。分析によって抽出することができるだけである。そして、それを指摘するならば誰もがなるほどと言うような種類のものである。子供は（もちろん大人も）これらのキューが遊びを指示する「フレーム」(＝額縁) だということを知らなければ、遊びという言葉ゲームに参加することができないのである。つまり、社会的協働への参加に失敗してしまうのである。それというの、彼の社会的前意識を作動させることに失敗しているからであり、この結果彼をいわゆる「社会化失敗者」にしているのである。

結論. メゾ社会学

最後に、ここまでの議論を要約して、結論と若干の展望を述べることにしよう。

社会化論の情性化と心理学への研究委託によって、社会理論の要衝たる社会化論の地位がおとしめられつつある、という認識が本稿の出発点であった。この要因を本稿では内面化の概念に求めた。内面化が社会化とほとんど同一視されることで、社会化は非常に個人的な問題でしかなくなってしまったからである。事実、内面が社会化に関わる機関であると考えると幾つかの不都合が生じることを例証した。そして、内面を媒介としない過程として言語習得と模倣（役割習得）の例を挙げた。

しかし、このことは内面の意義を抹殺しようとするものではない。内面は想像力、創意、批判、信仰などのために確保しておくべきなのだ。そうしないと、革新的な文化や社会運動・宗教活動などはその基盤を持たなくなってしまう。内面は少なくとも近代的個人にとって宿命である。

社会化が内面と別個に進行すると考えることは、自明性の領域がなぜ存在するのか

を説明することにもなる。これらが形成される領域をフロイトに依拠することで《社会的前意識》と呼んだ。これが個人と社会の接合の地点、個人と社会の中間領域である。この間主観的領域の生成と編制、構造と変容を辿るのが「ミクロ」でも「マクロ」でもない、いわば《メゾ社会学》の研究課題となるであろう。

＜注＞

- (1) 日本の文献のみに限って挙げるならば、松原治郎「社会化研究の流れ」日本教育社会学会編『教育社会学の展開』1972年、5～10頁；柴野昌山「社会化論の再検討—主体性形成過程の考察—」『社会学評論』第27巻、1977年、19～34頁；高橋均「社会化研究」『教育社会学研究』第34集、1979年、15～27頁などが代表的であろう。
- (2) ここで20年というのは、後述のバーガー&ルックマンの著作(1966)と次の二つの代表的リーディングスから数えてのことである。Clausen, J.A. (ed.), *Socialization and Society* (Boston, Brown and Company, 1968); Goslin, D.A. (ed.), *Handbook of Socialization Theory and Research* (Chicago, Rand McNally and Company, 1968). 欧米の社会化の研究書はほとんどが1960年代と'70年代前半に集まっている。
- (3) 上記のクローセンとゴスリンのリーディングスは心理学的研究が大半を占める。日本では菊池・斎藤編『ハンドブック 社会化の心理学』川島書店、1974年；同編『社会化の理論』有斐閣、1979年。また、ブラックボックス化による社会分析の顕著な例は、Kerckhoff, A.C. (ed.), *Research in Sociology of Education and Socialization*, vols. 1-4 (Greenwich, Jai Press)
- (4) しかし、このように言うのは単純化のしすぎかもしれない。近年の日本の社会学的な理論的研究としては、中山慶子「社会化システムの理論—システム分析のための一準備—」『社会学評論』第22巻、1972年、60～77頁；渡辺秀樹「家族における社会化過程について—構造機能分析による理論モデル構築の試み—」『社会学評論』第26巻、1975年、36～52頁；萩原元昭「言語的社会化とコミュニケーション」麻生・柴野編『変革期の人間形成』アカデミア出版会、1978年、37～54頁；清矢良崇「社会的相互作用としての初期的社会化の様式—しつけ場面におけるカテゴリー化問題—」『教育社会学研究』第38集、1983年、122～133頁；栗原孝「役割能力論の考察—J.ハーバーマスの人格論によせて—」『社会学評論』第34巻、1983年、309～325頁；亀山佳明「子どもの社会化と準拠者—社会的オジの不在について—」柴野昌山編『教育社会学を学ぶ人のために』世界思想社、1985年、93～110頁などがそれぞれの理論的基盤からのアプローチである。
- (5) ただしすべての発達心理学的研究が個人還元主義に陥っているわけではない。J. S. ブルーナーを中心とした研究動向は相互主観性に定位するようになっていく。例えば、Schaffer, H.R. (ed.), *Studies in Mother-Infant Interaction*, (London, Academic Press, 1977)
- (6) パーソンズ, T., 佐藤訳『社会体系論』青木書店、1974年。
- (7) バーガー, P. & T. ルックマン, 山口訳『日常世界の構成』新曜社、1977年。
- (8) しかし、内面化の概念から即座に対象としての「内面 (the interior)」が引き出されるわけではないことには留意しておくべきだろう。「内面化」は「習得」や「理解」以上の意味内容を持っているわけではなく、パーソンズもバーガー&ルックマンも個人の内面を直接対象にしたわけではなかった、論じることとも可能である。し

- かしながら、その場合には「内面化」は記述的表現でしかなく、その実質的内容が求められることになり、結局は個人心理学に連結してしまうのである。
- (9) 以下では「社会化」とは一次的社会化を指す。というのは、パーソンズもバーガー&ルックマンも一次的社会化の重要性を強調しているが、それに反対する理由が見当たらないからであり、そしてまた彼らの内面化論は一次的社会化を中心に進められており、設定を共有することが必要だからである。
 - (10) デュルケム, E., 麻生・山村訳『道德教育論』明治図書, 1964年, 22頁。
 - (11) Giddings, F., *The Principles of Sociology*, 1896.
 - (12) デュルケム, 同上。
 - (13) バーガー, P. & S. プルバーク, 山口訳「物象化と意識の社会学的批判」『現象学研究』2, せりか書房, 1974年, 105頁。
 - (14) 「個人」と「社会」の「論理タイプ」が違うことに由来する特殊な問題については, 加藤隆雄「社会化の社会学—個人と社会の接合形式—」『東京大学教育学部紀要』第27巻, 1988年。
 - (15) デュルケム前掲書, 22頁。
 - (16) パーソンズ前掲書, 215~217頁。なお, パーソンズらによって分析的に設定された内面化のメカニズムは次の四つを含むものである。(i)新しい客体の誘導に関するメカニズム, (ii)代償のメカニズム, (iii)防衛のメカニズム, (iv)同一化のメカニズム。(パーソンズ, T. & R. F. ベールズ, 橋爪他訳『核家族と子どもの社会化』(下), 黎明書房, 62~75頁) こうして彼らの社会化論は非常に個人心理学的なのである。
 - (17) パーソンズ前掲書, 215頁。
 - (18) 同上, 230頁。
 - (19) 同上。
 - (20) バーガー&ルックマン前掲書, 225~226頁。
 - (21) 同上, 220~221頁。
 - (22) 同上, 220頁。
 - (23) 同上, 219頁。
 - (24) 同上, 224頁。
 - (25) ギデンス, A., 松尾他訳『社会学の新しい方法規準』而立書房, 1987年, 第2章。Giddens, A., op. cit., pp. 41-64.
 - (26) ダーレンドルフ, R., 橋本訳『ホモ・ソシオロジクス』ミネルヴァ書房, 1973年。
 - (27) Wrong, D.H., "The Oversocialized Conception of Man in Modern Sociology", *American Sociological Review* 26 (1961), pp. 183-193.
 - (28) 個人意識の発生は発達段階のより後期に属するものである。したがって, 個人意識を云々するのは, 一次的社会化を扱うという趣旨に反しているかも知れない。ところが, このこと自身が内面化の概念に対する否定的証拠になっている。個人意識の発生が発達のより後期だとしたら, 個人意識の発生していないはずの一次的社会化においても内面化が行われることは, 内面が個人意識とは別のものであることを証明することになるのだ。
 - (29) アンソニー・ギデンスは「実践的意識 (practical consciousness)」という用語をほとんど同じ意味で用いているが, これを採用しないのは, 彼にとって行為主体 (agent) の再構築が課題の一つであり, それゆえ行為主体の内部にこの実践的意識を取り込もうとする姿勢がうかがえるからである。ここで言及されているのは,

- 「意識」と形容してよいものではない。Giddens, A., *The Constitution of Society*. (Cambridge, Polity Press, 1984), pp. 41-45.
- ③⑩ シュッツ, A., 渡部他訳『アルフレッド・シュッツ著作集第1巻 社会的現実の問題〔I〕』マルジュ社, 1983年。及び Garfinkel, H., *Studies in Ethnomethodology*. (Cambridge, Polity Press, 1984).
- ③⑪ ただし, 問題関心は必ずしも一致していないが, エスノメソドロギーからのアプローチも見られる。
- A.V. Cicourel, "The Acquisition of Social Structure: Towards a Developmental Sociology of Language and Meaning", in *Cognitive Sociology*. (Harmondsworth, Penguin Books, 1972.) 及び "Interpretation and Summarization: Issues in the Child's Acquisition of Social Structure", in Glick, J. & K.A. Clarke-Stewart (eds.), *The Developmental of Social Understanding*. (New York, Gardner Press, 1978.), pp. 251-281. 日本では清矢, 前掲論文。
- ③⑫ ヴィトゲンシュタイン, L., 藤本訳『哲学探究』大修館書店, 1976年, 20頁。
- ③⑬ 同上, 33頁。
- ③⑭ Goffman, E., *Frame Analysis*. (Boston, Northeastern University Press, 1974)
- ③⑮ ヴィトゲンシュタインは, $a_n = n^2 + n - 1$ という式に基づく数列を続けることと, この式に思い当たることとは別物であるという議論をしている。前掲書, 123~125頁。
- ③⑯ 同上, 36~37頁。
- ③⑰ 同上, 18頁。
- ③⑱ 同上, 35頁。
- ③⑲ 同上, 16頁。
- ④① Bruner, J.S., "Early Social Interaction and Language Acquisition", in Schaffer (ed.), 1977, pp. 271-289.; Bruner, J.S., "Ontogenesis of Speech Acts", *Journal of Child Language* 2 (1974) pp. 1-19. また, スターン, D., 岡村訳『母子関係の出発』サイエンス社, 1979年, p. 12. における母親の「赤ん坊により引き起こされた社会的諸行動 (infant-elicited social behaviors)」の概念を参照。
- ④② ミード, G. H., 稲葉訳『精神・自我・社会』青木書店, 1973。
- ④③ 廣松渉『世界の共同主観的存在構造』勁草書房, 1972年, 135~156頁。
- ④④ G. ベイトソン「遊びと空想の理論」, 佐伯他訳『精神の生態学 (上)』思索社, 1986年, 265~285頁。
- ④⑤ C. ガーヴェイ, 高橋訳『「ごっこ」の構造』サイエンス社, 1980年, 183~198頁。